

昭和58年度貝類漁場の形成条件 適正利用に関する研究¹⁾ (要約)

田中 俊輔・青山 禎夫・仲村 俊毅・平野 忠・高橋 克成・
三津谷 正・永峰 文洋

1) 増殖技術改良研究

地まき放流を実施した陸奥湾内16漁協・支所中8漁協・支所が放流した昭和57年産ホタテガイを昭和58年9月に桁網で調査した。 $\frac{\text{生貝中の正常貝}}{\text{全個体数(生貝+死貝)}} \times 100$ が70%を越えたのは蓬田漁協だけであった。青森県津軽海峡地区へ放流サイズに達した稚貝を地まき用種苗として販売した横浜町漁協、むつ市漁協では上記値が31.5%、29.5%で、両漁協は本調査を初めて実施した昭和55年度の両漁協の調査結果89.6%、97.8%に比較して大きく後退した。

2) 地まき増殖実証試験(脇野沢)

第3回目の追跡調査を9月に行い(桁網による)生残率86.6~85.1%、殻長97.5~97.6mm、全重量は101.6~104.3gであった。第4回目の追跡調査を12月に行い(潜水による)、生残率91.9%、殻長94.8~103.0mm、全重量は89.7~103.0g²⁾であった。

3) 漁場の有効利用および生産性評価研究

55年~57年に陸奥湾内の全域で採取した大型底生生物の分布状況を整理した結果、巨視的にみてホタテガイと他の底生生物との関係によって漁場の質の評価がある程度可能であることがわかった。

58年産自然貝発生状況調査を潜水調査によって59年2月~3月に横浜町と川内町で行った。自然発生貝がそれぞれ5個体、6個体採取された。

4) 漁場環境条件調査

1月~5月の水温が平年より最高2℃も高めに推移したために母貝の産卵が例年より1ヶ月早く、稚貝採取も7月上旬から始まった。

1) 本研究の詳細は、指定調査研究事業報告書「貝類漁場の形成条件適正利用に関する研究、総括(昭和56年~58年)」として印刷中である。

2) 実証試験漁場に放流したホタテガイは、59年9月から採捕する。